

『譯家必備』の第1項目「初進館」について

喜多田 久仁彦

〈提要〉

江戸時代、長崎は日本唯一の対外貿易港口。在長崎有一个叫做“唐通事”的职业群体。他们的工作不但是口译和笔译，还承担了对唐商发放贸易许可证，管理抵日商人和船员等业务。他们作为翻译或商务官在日中贸易上作出了极大贡献。由于这种通事职业是子承父业，代代相传的，所以又被叫做“家职”。为了继承“家职”，他们还亲自编写教材来教授“唐话（中文）”。

本文选择这些教材之一《譯家必備（译家必备）》中的“初進館（初进馆）”为讨论对象，通过分析它在形式、内容等编撰上的侧重面，来探讨“初进馆”施教对象的水平、学习重点以及教材意图等等特征。

はじめに

江戸時代の対外交渉の窓口であった長崎に「長崎唐通事」¹⁾(以下、「唐通事」と略称する)という中国語の通訳官が存在した。唐通事は、長崎や平戸などに帰化定住した中国人の子孫で、長崎奉行支配下の地役人として世襲的に職務を担い、対中国の通商貿易の最前線で中国語を駆使して活躍した。唐通事が使用した中国語は、各唐通事家に伝わる「南京口・福州口・潮州口・泉州口」と呼ばれる専門の言葉で、それは祖先の出身地の言葉であり、「口」の字が示すように日本人と中国人の間に意思疎通を成立させるための口語であった。唐通事は、日本社会で祖先から伝わる専門の言葉と家職としての通事職を次世代に継承するため子弟への教育を重んじ、子弟の幼少期からの家庭内教育や中国語学習用の教本²⁾の作成・編輯などを行った。この教本には、唐通事の日本社会への同化が進み、日本語を日常用語とし、中国語の習得が困難となっている唐通事の子弟に対して中国語学習の重要性を説く内容や唐通事になるためには言葉の習得以外に教養を身につける必要があると説く内容などが挿入されているものがある³⁾。それは将来唐通事になる子弟に現状認識をさせた上で、専門の言葉と家職の通事職を次世代に継承する決意を再確認させるためであったのだろう。

唐通事の手になる教本は、唐通事はどのような中国語を話したのか、どのようにして子弟に中国語を教えたのか、どのような意図で教本を作成したのかなど、唐通事の中国語・中国語教育の実情を知る上で手がかりを与えてくれる貴重な資料である。明治政府が1871（明治4）年に通訳養成を目的として外務省内に開設した「漢語学所」で唐通事の教本が使用されたことを考え合わせると、日本の中国語教育、とりわけ実用中国語教育の歴史を考察する上で極めて重要な資料であると考えられる。

唐通事の教本の内容を通して、子弟に対する教育の内容・方法を明らかにするため、喜多田(2011)では教本の一つである『譯家必備』の中から、来航中国人の長崎滞在中の生活に関わる項目「拜聖 拜媽祖 看花 媽祖會 關帝會 王道禮 誦經 上墳身故八朔繳禮」を取り上げ、唐通事の中国語の教育・学習は、通商貿易の業務関係だけに止まらず、来航中国人に対する管理業務の必要から生活・行事等に関わる内容もその対象としたことを指摘した。

小論は、『譯家必備』の第1項目である「初進館」を取り上げ、本文の形式と内容から「初進館」の教材作成の意図を考察するものである。

1. 『譯家必備』について

『譯家必備』という教本について概観しておく。「譯家」とは「通事」のことで、『譯家必備』は、唐通事が「必ず備えておく」べき語学力・知識を習得するためのものであった。

長澤規矩也(1976)は、『譯家必備』を『唐話辞書類集第20集』に収め、その解題で次のように述べている。

譯家必備 江戸末期鈔本

長崎の通事の爲に、清商との対話を項目毎に録したもの。初めて通事となった時に來賀の清人との會話を記した「初進館」から、來船の乗員との會話「唐人進港」、漂着の清船の乗組との對話「撻送漂到難船」、外国へ漂着した邦人を送還して來た清船の船員との會話「護送日本難人」、貿易の取引「本船起貨」「貨庫」「清庫」以下具體的問答を記載してゐる。體裁は全く辞書ではないが、語彙が既刊の各書と非常に違ってゐるばかりでなく朱筆で訓點を施してあるので、唐話研究には重要な資料であると認めて、本集の最終巻に輯録することを企てた。然るに、架蔵本を底本として撮影中、蛀損が甚だしいので、靜嘉堂文庫本を借照したところ、彼は四卷に分けて無點。末に「譯家必備全部予祇役于長崎使譯司抄寫之／藏一本於家塾／寛政七季八月 近藤重蔵」の奥書があるが、その轉寫本で、東條琴臺の舊蔵、「掃葉山／房蔵書」の印記を捺し、誤脱が非常に多い。予の蔵本は、朝川善庵の孫である片山格(修堂、尚友館)の舊蔵であり、是亦脱誤がある。よつて、その照片に、靜嘉堂文庫所蔵本を以て一々對校したものを底本とすることにした。對校兩年に涉り、筆を執つては止むこと數次、その爲、校訂の體裁、前後多様となつてしまつた⁴⁾。

長澤規矩也(1976)では、『譯家必備』は、辞書のような形式ではなく⁵⁾、中国船入港・貿易などに関わる具体的な場面における対話を主な内容とする教本であると説明している。『譯家必備』が唐通事の教本としてどのように使用されたのかという点については、唐通事の学習過程と教本を挙げた武藤長平(1926)に次のような記述がある。

長崎に於ける唐通事の支那語稽古の順序を略説するが、唐通事が最初に発音を学ぶ為に『三字経』『大学』『論語』『孟子』『詩経』等を唐音で読み、次に語学の初歩即ち恭喜、多謝、請坐などの短き二字を習ひ、好得緊、不曉得、吃茶去などの三字話を諳んじて更に四字以上の長短話を学ぶ、その教科書が『譯詞長短話』五冊である。それから『譯家必備』四冊『養兒子』一冊『三折肱』一冊『醫家摘要』一冊『二才子』二冊『瓊浦佳話』四冊など唐通事編輯にかゝる写本を卒業すると此に唐本『今古奇觀』『三国志』『水滸伝』『西廂記』など師にきて学び進んで『福恵全書』『資治新書』『紅樓夢』『金瓶梅』などを自習し難解な處を師にすといふのが普通の順序である⁶⁾。

「唐通事編輯にかゝる写本」という記述から、『譯家必備』は、唐通事自らが編輯した教本であるということが分かる⁷⁾。中嶋幹起(2015)は、武藤長平(1926)が示した唐通事の中国語学習の教本について、次のように指摘している。

これらのうち唐通事の中国語学習に最も重宝がられた教科書は、東京通事魏五左衛門の編纂になる『訳司長短話』と貿易交渉の場での実際のやりとりを想定した会話で記されている『訳家必備』とであって、この二冊を卒業することが何よりも肝心とされていた⁸⁾。

以上の解説や指摘から、『譯家必備』は、唐通事が作成した発音と短い日常用語の学習を終えた後に貿易の現場で必要な会話を学習する重要な教本の一つであったことが明確である。

『譯家必備』の内容を見てみると、33の具体的な場面が設定されており、唐通事と中国人の会話を主とし、それを補う地の文がある。

初進館 / 唐船進港 / 捧送飄到難船 / 護送日本難人 / 本船起貨 / 貨庫 / 清庫又曰清貨 / 王取 / 插番 / 出印花布疋 / 起米洗艙油桅起石鈔包篷 / 領伙食 / 講價 / 出貨交貨秤貨 / 拜聖 / 拜媽祖 / 看花 / 媽祖會 / 關帝會 / 王道禮 / 誦經 / 上墳身故 / 秤椅桶 / 修船 [火罩] 洗修杉板放船看舵看修理 / 打索路 / 八朔繳禮 / 下頭番豎桅補蓬搭客眼桅 / 裝銅 / 看包頭講包頭秤包頭裝包頭秤添退包頭雜包 / 巡船河下送水菜柴火 / 對帳 / 開船搬庫領牌 / 口外守風

([火罩]は「火」偏に「罩」の字)

これらの項目は、「初進館」・「牽送漂到難船」・「護送日本難人」を除いて、通商貿易のために長崎港に来た中国船の入港・積載品の処理・来航中国人滞在中の行事・船の手入れ・信牌(通商許可証)の受領など出港に向けた準備等々、中国船の入港から帰航までの流れに沿った具体的な順序になっていることから、『譯家必備』は、唐通事の実務上必要な語学力を養成するだけでなく、業務の手順・方法を習得するための教本であったと考えられる。

2. 「初進館」の内容について

小論で取り上げる『譯家必備』の第1項目「初進館」について確認しておく。今回使用した『譯家必備』は、『唐話辞書類集』第20集所収のもので、その中の「初進館」は、遺漏を補う書き込みを含めると4000字程になる⁹⁾。

「初進館」の教材作成の意図を検討する前に、本文の内容を確認しておきたい。項目名である「初進館」は、「初めて館¹⁰⁾(唐人屋敷)に入る」という意味で、冒頭で場面と人物の説明がなされる。

大凡通事到了十五六歲，新補了學通事¹¹⁾，頭一遭進館的規矩，到了公堂¹²⁾看見在館船主財副。
(p. 3)¹³⁾

方纔值日老爹對唐人們說道：“这位是林老爹¹⁴⁾的阿郎。此番新補了學通事，今日頭一遭進來見見眾位。” (p. 3)

新しく稽古通事となった林通事の息子(林稽古通事)が館(唐人屋敷)に行くという設定である。この林稽古通事が唐人屋敷で体験する内容がそれに続き、4つの場面で構成されている。

場面1 唐人屋敷の公堂で先輩通事や中国人と対話をする。(pp. 3-6)

場面2 中国人(陳三官)に唐人屋敷内を案内される。(pp. 6-12)

場面3 中国人船主より接待を受ける。(pp. 12-18)

場面4 公堂に戻り中国人と対話をした後、帰路に着く。(pp. 18-19)

それぞれの場面の展開に従って内容を見ていくことにする。なお、本文には、句読点は一切なく、改行もされていない。本文の内容・形式等を理解する一助として、筆者が現代中国語の表記方法に基づいて句読点を付け、対話の部分では主体を明確にするために林稽古通事を「林」、唐人を「唐)」で示した。

場面1 唐人屋敷の公堂で先輩通事や中国人と対話をする。

当番の通事から中国人船主に紹介され、年齢・祖父・父・兄弟など家族のこと・既婚か未婚か・住居など事細かな質問を受ける。

唐) 原來林老爹的令公子。恭喜恭喜。貴庚多少?

林) 不敢。

唐) 屬鼠，屬牛，屬虎，屬兔，屬龍，屬蛇，屬馬，屬羊，屬猴，屬雞，屬狗，屬豬?

林) 今年交十七歲。

唐) 尊翁好麼?

林) 托福托福。

唐) 令尊今日為什麼不進來?

林) 今日家父本該帶小弟進館。因為早間王府裡有字兒叫，諒必此刻還在王府裡辦什麼公事。

唐) 老爹府上在那一條街?

林) 舍下住在某街。

唐) 有幾位昆仲?

林) 小弟有兩個家兄，一個家姊，三個舍弟，兩個妹子。

唐) 老爹娶親麼?

林) 定是定了，還不曾娶在家裡。

さらに、ある中国人船主が林稽古通事が初めて唐人屋敷に来たと耳にして、自室に招きお祝いすると言う。

唐) 老爹頭一次進館，到敝庫來頑頑。請三杯寡酒，要賀喜老爹。

林) 多謝多謝。就到賣庫來拜拜。

唐) 晚生先一步進館候駕。

林) 豈敢。請便請便。

場面2 中国人(陳三官)に唐人屋敷内を案内される。

中国人(陳三官)に案内され、唐人屋敷内の施設・物品などについて説明を受けながら屋敷内を巡る。林稽古通事にとっては、未知の世界であり、すべてが新鮮に感じる。上の「晚生先一步進館候駕」から明白なように船主である中国人は自ら案内せず、屋敷内を案内するのは別の人で、後に「陳三官」という名であることが分かる¹⁵⁾。場面2の会話は、林稽古通事と陳三官の間で交わされる。

①土地廟とその付近の空き部屋

唐) 新老爹進來了。晚生陪你走走。這裡就是土地廟了。

林) 請教，這箇池塘上為什麼造起臺子? 諒來必有用頭。

唐) 那箇就是戲臺。

林) 這裡一帶幾間庫都空了。為什麼沒有人住呢?

唐) 這幾間庫都是舊庫，樓上都塌了，東歪西倒的。……幾天前還有人住在這裡，各各生怕起來，都搬去了。……那前面幾箇篷子開店的賣雜貨，做糕餅，做裁縫，賣燒酒，賣麵食，這幾間沒有樓的，還是耐得住了。

②天后宮（媽祖堂）

林）天后宮前插了紅旗。我們也有時節走過牆外沒有看見那箇旗。

唐）正是時常沒有插旗。今朝十五好日子了。每月初一十五是插旗。

林）正是好功夫。我再問你掛在前面的神帳有皇恩欽賜四箇大字，這是什麼緣故？

唐）老爹原來不曉得，前年乾隆皇帝南巡的時節恩賜的正頭。這有一個緣故。

③觀音堂

唐）到了觀音堂。老爹拜拜。

林）這地方好乾淨！

…中略…

林）這一尊觀音菩薩也是唐山帶來麼？

唐）正是這箇酉年二十二番船主沈綸溪許塑的。韋陀天是姓熊的船主帶來的。他起呈子要造韋陀天堂，王家不准就歇了。

場面3 中国人船主より接待を受ける。

唐人屋敷内の案内が終わり、「屋敷内の部屋で待つ」と言った中国人船主の部屋に到着後、「茶→点心→料理→酒→スープ→果物・菓子→酒→拳（酒座の遊び）」の順で接待を受ける。

[方纔轉了觀音堂，走到了十五番庫來，上了樓，看見小公司，問一問說道：“船主有麼？”“正是在。請老爹。”]（[]は地の文を示す。）

唐）老爹請茶。

林）請教，唐山茶葉有幾樣？

唐）也不多。叫做珠蘭茶就是於今老爹用的。還有雨前茶、松蘿茶、武夷茶。……煙葉是蒲城的好，也倒不如東洋的有香氣好。

[吃一回茶過了，排出點心來。……過了點心就排起桌子來，菜數也多。……船主叫一聲上菜，客人說不用了。]

林）小弟今日頭一遭進來，拜識長兄，多蒙錯愛，更蒙賜這樣美品佳餚，酒醉肉包實在當不得。不必再費心。

[方纔兩道點心、兩道湯也過了。船主又說。]

唐）老爹用飯麼？

林）不敢。用酒多了，請收了席。

[席散了。小公司捧出一箇面盆，盛滿了溫溫的湯，放在椅子上。]

唐）請老爹洗手。

[過了一歇就排出幾十樣果品來。……主人吃了一盃要同客人豁拳。]

唐) 老爹們會豁拳。晚生要請教要請教。

…中略…

林) 於今要暫別了。今天偶然過來蒙賜盛席，多多相擾了。多謝多謝。

唐) 豈敢。怠慢怠慢。老爹再坐一回。用用茶。

林) 不敢。多坐了。

[那時主人來送客，客人說道。]

林) 請便，請留步。

唐) 豈敢。還要送老爹到公堂去。

林) 不敢當不敢當。

場面4 公堂に戻り中国人と言葉を交わし、帰路に着く。

中国人船主の接待が終わり、公堂に戻る。中国人から林稽古通事が顔立ち・話し方・声などを賞賛され、中国人としばし話した後に帰宅する。

[出了二門，到了公堂。公堂上還有幾箇唐人把一箇新通事圍住在中間，你一句我一句稱讚他說好。]

唐) 老爹正真一箇聰明相貌，滿面福氣，眉毛生得好的狠。說話伶俐，好箇清亮的聲音。明日一定大大發財了。老爹幾時再進館？

林) 再過幾天進來值日。

[方纔起身，向個人作揖說道。]

林) 小弟坐久了，恐怕家裡懸望。少陪少陪。

上で拾い上げた部分は、本文の展開が理解し易い会話文と地の文である。この他に案内役の陳三官による建造物の詳細な説明・由来やそれに対する林稽古通事からの質問などが場面の展開に合わせて挿入されている。

3. 「初進館」作成の意図

語学の教本を編む場合、対象者・レベル・学習目標・学習効果を想定して、場面設定・語彙・文法項目などについて配慮・工夫が必要であることは言を俟たない。以下では「初進館」は、どのような意図で作成されたのか、また、教材の内容にはどのような特徴があるのかを検討する。

3.1 語彙の充実

「初進館」の本文には関連する単語を列挙という形で、無理なく盛り込み、語彙の充実を意図したことが窺える。単語のジャンルとその数を挙げて、実際の表現を見してみる。該当する単語は

筆者が「・」で示した。(〈 〉)は単語の数を, []は前後の文を示す)

[年齢, 姓・号] に関する単語 〈16〉

[贵庚多少?]

屬鼠, 屬牛, 屬虎, 屬兔, 屬龍, 屬蛇, 屬馬, 屬羊, 屬猴, 屬雞, 屬狗, 屬豬?
尊姓呢? 賤姓林。台號呢? 賤號某。

[家族等] に関する単語 〈16〉

尊翁好麼?

令尊今日為什麼不進來?

家父本該帶小弟進館。

令叔老爹好幾天不進來?

家叔一向病在家裡。

有幾位昆仲?

小弟有兩個家兄, 一箇家姊, 三箇舍弟, 兩箇妹子。

[這幾位都在府上麼?]

不是。一箇大家兄在別鳴王家手裡吃些錢糧。二家兄過房到家伯裡去。家姊出嫁了。一箇舍弟做醫生。一箇是做生意。一箇還在家裡。一箇舍妹許家做同僚張某人。一箇還是年小。

[老爹娶親麼? 定是定了, 還不曾娶在家裡。]

那一位的令愛?

陳按察的姪女劉問信的小女。

[職業] に関する単語 〈7〉

一箇舍弟做醫生。一箇是做生意。

那前面幾箇篷子開店的賣雜貨、做糕餅、做裁縫、賣燒酒、賣麵食。

[教養] に関する単語 〈4〉

這一位不比今日的後生家, 會做詩、會講話、做文章的道理也略略明白, 更兼會寫字。

[建造物の部分] に関する単語 〈3〉

連這亭子大門周圍的籬笆的都是新做的。

這六扇亮榻好大功夫了。又要這裡做欄杆。

[宗教用品] に関する単語 〈4〉

再要三官菩薩的錫五事, 關老爹的玻璃燈, 籤訣牌, 籤子筒也是重新添做。

[唐人の部屋の調度品] に関する単語 〈4〉

前面排了一張桌子, 放着香爐、香盆。……傍邊三四隻煙盤, 排得整整齊齊。

[花] に関する単語 〈7〉

花瓶裡頭插起薔薇花、梅花、菊花、長春花、山茶花、水仙、花蘭花。

[茶] に関する単語 〈4〉

[老爹請茶。有茶。請教，唐山茶葉有幾樣？]

叫做珠蘭茶就是於今老爹用的。還有雨前茶、松蘿茶、武夷茶。

[点心] に関係する単語〈6〉

點心也不止一樣。白扁豆、蓮子、龍眼、荔枝、珠粉、西國米。

[主菜] に関係する単語〈28〉

菜數也多。燕窩、雞鴨、小炒肉、東坡肉、燒雞、燒肉、羊肉、羊脯、火腿肉、豬頭、豬肝、雞肝、鴨羹、蟹羹、肉圓、魚圓、魚糕、魚肚、鹿筋、團魚、河鰻、七星蛋、鯉魚、鯽魚、海參、鮑魚、魚翅、江珧柱。

[料理の付け合わせ] に関係する単語〈14〉

澆頭也有幾樣。香菇、海粉、榆肉、木耳、松菇、冬筍、乾筍、大蒜、青蔥、蔥白、青菜、落花生、韭菜、金針菜。

[小皿・つまみ・漬け物] に関係する単語〈12〉

若問小菜的名色，肚蚨、蝦米、淡菜、鹽小魚、鹽螺、蚶子、蛤蜊、蝦醬、瓜筍絲、鹽菜、甜醬、春不老。

[菓子・果物] に関係する単語〈25〉

排出幾十樣果品，看見夾砂糕、桂花糕、眉公餅、太史餅、明糖、明姜、黃梨、桔餅、泡糖、荔枝、紅棗、黑棗、青果、胡桃、松子、榛子、瓜子、雪梨、荸薺、佛手柑、冬瓜糖、牛皮糖、雲片糕、麻餅、芝麻糖。

場面によっては列挙の形式ではないが、近い場所に関連語句を配置している部分もある。

[飲酒] に関係する語句〈15〉

看見老爹酒總不吃，味薄了，不好請。

老爹就冷了，再換一盃。

不妨得，照小弟一樣量淺的人，熱酒難當，冷的倒好吃。這一盃乾了，請收盃。

這那裏使得，晚生看見老爹量好，況且唐山酒味淡薄了，多用幾盃也不醉人了。

…中略…

老爹唐山酒吃不慣，這箇小店拿進來的京酒，再用幾盃。

你看，這樣面孔紅了，酒氣不醒。

このように列挙や相前後して近い場所に関連語句を配置する形で、学習者の語彙の充実を図る方法は、唐通事編輯の他の教本にも用いられており、唐通事編輯の教本の特徴の一つである。単語の列挙は、全文が読物体で初級段階を終えた学習者向けの『養兒子』にも見られる。筆者が句読点を加え、該当箇所を「・」で示した。

父母死了也不曉得送喪的道理，把屍首埋在地中，不去拜墓，不請和尚念念經，帶孝不肯吃素，只要吃酒吃葷菜。天天買魚吃紅魚、山魚、鱸魚、鮑魚、龍蝦、拳螺、鱘魚、命魚、鱈魚、海鰻、烏賊魚、比目魚、金線魚、老級魚、帶魚、海翁魚、黑魚、金槍魚、河豚、蟹、車螯、娼娥、蝦子、蛤子、蛤蜊、蜆、螺螄、海蜇、江瑤柱、還有淡水魚、鯽魚、鯉魚、河鰻、銀魚、團魚、腳魚、泥鰱、田雞、田螺。若要野味呢，牛兒、馬兒、羊兒、兔兒、狐狸、野豬、鹿兒、豬兒、野雞、野鴨、水鴨、鳧兒、狗兒、老鼠、黃鶯、雁兒、鶴兒、孔雀、鳳凰、貓兒、鳶鳥、烏鴉、斑鳩、鴿兒、麻雀、鵝鳥、鸞鷲、鴛鴦、燕子、雞蛋、鴨蛋、魚子、魚糕。

(『養兒子』 p. 11)¹⁶⁾

生臭料理の材料名の単語が71列挙されている。この他にも「味に関係する単語6・衣類に関係する単語13・色に関係する単語16・語学に関係する単語16・数量に関係する単語10・寺僧に関係する単語7・遊戯に関係する単語24・野菜名26・菓子名15・果物名・25・植物名40・罵語23・病名16」(数字は単語の数)が並ぶのである。関連語句がある時は自然に文の中に溶け込む形で、またある時は不自然に・執拗なほどに列挙し学習者の語彙の充実を図ろうとする意図が明確に反映されている。「初進館」・『養兒子』がこのような方法を用いたのは、語彙の習得が中国語学習の重点の一つと考えた証であろう。

しかし、「初進館」で使用されている単語を観察すると、通事の業務に直接関係する専門的ではなく、日常用語の域を出ない。この点から「初進館」は、『養兒子』などの一般的な教本同様、専門的な学習をする前の教材として作成されたのではないかと推測できる。

3.2 学習意欲の喚起

教本は、通常、学習者を個別に特定せず、ある一定のレベルの不特定多数の学習者を対象とするものである。この「初進館」も当然、唐通事になろうとする多数の若者(唐通事の子弟)が使用することを前提に編まれた教材であったであろう。その教材に唐通事になる心構えや叱咤激励など学習意欲を喚起する内容を意図的に挿入することは、通事職が父子相伝の「家職」であり、一時は帯刀も許された¹⁷⁾権威ある職であったことから、子弟の語学の上達や出世を願う親世代からすれば至極当然のことであったと考えられる。

「初進館」には、中国語学習の心構えを説くために、先輩通事が林稽古通事の能力や人柄を引き合い出し、他の若者(通事家の子弟)の不真面目・非礼を戒める箇所がある。筆者が該当箇所を「・」で示した。

值日老爹回答說道：“虧得，這一位了不得，用功夫讀書。據我看來，目今後生家乖巧得狠。到了十四五歲就不學好起來。讀書學話這兩樣事，不但不留心丟掉了，竟不想一味哩不長俊，只為玩話過日子。不肯尊敬長上，後生家禮貌一點也沒有。這一位不比目今的後生家，會做詩又會講話、做文章的道理也略略明白，更兼會寫字。他寫的端楷皆是字體端正得狠，時常有人

來求他的字。又是做人極忠厚又聰明，算得一箇才子。我們在外頭照他一樣的做人是罕得見。”
(p. 5)

林稽古通事は、能力・人柄いずれもずば抜けているが、より一層勉学に励むようにという中国人の激励の言葉もある。

只管學學，學不如慣。明日老爹幫當年幫講價的時節，經過的事情再沒有難辦的道理。
(p. 19)

このような戒めや激励は、唐通事が編んだ教本に頻繁に登場する。例えば、以下のものがある。文中の句読点は筆者による。(['』は教本名を示す。)

現見我十分嚴緊的，都不聽我說，不肯學好，還禁得不罵不打？（『小孩兒』 p. 32）¹⁸⁾

一來守規矩，做人要正經些，二來發狠讀書，當心學話。（『小孩兒』 p. 35）

目今後生人家都不肯學，一到館中見了唐人，講也講不來，聽也聽不出。（『養兒子』 p. 14）

我們通事家的兒子，學則底下的人也高身做大通事。不學的時候，大通事兒子不得高身。

（『養兒子』 p. 17）

原來通事的兒子讀書寫字講唐話這個家常茶飯，不足為奇。還要生意上的道理也要通的。

（『養兒子』 p. 17）

如今長崎的學生們只圖虛名沒有實學。一年半載坐在燈窓之下，識得些字兒就賣弄學問，在街上揣書在懷裏走來走去，遇着人家咬文嚼字的說長說短，同ヶ三朋五友、東鄰西壁去講究說些字不字文不文的話，有什麼意思？（『官話纂』 p. 27）¹⁹⁾

據我看來，目下長崎の後生家擔了個通事的虛名，不去務本。只看得玩耍要緊。不但詩賦做文打不來，連唐話竟不會講，穿領長衣，插把好刀，只說自己上等的人，東也去耍子，西也去遊々蕩々。買酒買肉，只管花費銀子，撒潑得緊。這個大々不是了。（『唐通事心得』 p. 1）

我和你說你們，學唐話須要背得出。若沒有背在肚裡，憑你每日學了幾百句也用不着。

（『長短拾話唐話』 p. 1）

「初進館」の戒めや激励は、ここに引用した『小孩兒』・『養兒子』・『官話纂』・『唐通事心得』・『長短拾話唐話』と同様、明らかに学習途上にある唐通事家の子弟に対するものである。

唐通事が教本に心構えや叱咤激励など学習の必要性を説く内容を盛り込んだのは、通事家を維持・継承する上で子弟の語学力に対して不安や危機感を抱き、学習意欲を喚起する必要に迫られていたからなのであろう。

3.3 唐人屋敷を通しての異文化理解

「初進館」の特筆すべき点は、本文の場面設定を唐人屋敷としたことである。1603（慶長8）年初めて唐通事が長崎奉行によって正式に任命されて後、1639（寛永16）年の幕府による鎖国政策の完成、唐通事たちの世代交代などを経て、中国語がすでに母語ではなく、学習の対象となっていた唐通事にとっては、中国の文化も学習する必要に迫られていたと推察される。そこで本文の場面設定を唐人屋敷とした教材「初進館」を作成して、次世代の通事が中国独特の文化・習慣など異文化の理解ができるように考慮したのであろう。それが明確な部分を見てみる。

林稽古通事が土地廟前で舞台を見つけて陳三官に質問する場面で、貿易のために海を渡る者は菩薩の庇護に頼り安全の願掛けをし、菩薩に感謝の気持ちを表すために芝居を奉納するのだと耳にする。

林) 請教, 這箇池塘上爲什麼造起臺子? 諒來必有用頭。

唐) 那箇就是戲臺。

林) 時常做戲麼?

唐) 不是。二月初二是土地公的聖誕。通館各番在這箇廟上供養三牲各樣果品, 結綵掛燈, 又幾折戲鬧一兩天。真箇好頑。明年老爹進來看就曉得了。

林) 箇裡有戲子麼?

唐) 有的。弟兄裡頭會做戲的多。又有幾箇師父。

林) 不做什麼生意, 單靠着做戲吃飯, 這箇我不信。年裡頭不過一兩會的戲工錢也有限。那有這樣大受用?

唐) 不是這樣說。我們是走洋的人。只靠菩薩的保佑平安來往幾担。有時節在洋中逢着大風暴受苦。許下愿心的做戲酬謝菩薩。(pp. 7-8)

また、天后宮の「神帳」の四文字「皇恩欽賜」は、乾隆皇帝から林という姓の者が下賜されたが、勿体なくて自分では使えないので、この長崎の地まで持って来て菩薩に捧げたという由来を説明する。

林) 我再問你, 挂在前面的神帳有皇恩欽賜四箇大字。這是什麼緣故?

唐) 老爹原來不曉得。前年乾隆皇帝南巡的時節, 恩賜的疋頭。這有一箇緣故。往常聖駕出去的時節, 叫人家關門閉戶迴避了不許拜駕。這一遭乾隆皇帝的南巡不是這樣。他的意思做皇帝的把百姓認做親生的孩兒, 不認得爹娘, 那裡使得? 所以自家騎在馬上走, 叫百姓都出來拜, 更有一樁好事。不費民間一箇銅錢倒把自家的金銀緞疋恩賜民家, 各各歡喜得很, 又叫出外的遠商來賞賜疋頭各色。那時一箇姓林的在那裡領了這一疋緞子, 自己不敢用, 所以帶到這裡來供養菩薩的了。(pp. 9-10)

この様な来航中国人の信仰上の慣習についての知識を得ることや「2. 初進館の内容について 場面3」の内容である中国特有の食文化・食習慣に触れることなどは、唐人屋敷を除いては不可能なことであった。そのため「初進館」は、当時「長崎における異国（中国）」とも言える唐人屋敷を教材の場面として設定し、林稽古通事と中国人との対話を通して、中国の文化・習慣についての知識を習得させ、さらには「乾隆帝の南巡」など中国の情報をも獲得させようとしたのであろう。これは他の教材にはない「初進館」の特徴的な内容であると考えられる。

まとめ

「初進館」作成の意図をまとめると次の3点になろう。

①日常生活に用いる一般的な語彙の充実。

唐通事の業務に関する専門的な語彙や表現を使用せず、日常用語に限定した語彙の習得を意図した。

②学習意欲の喚起。

父子相伝の通事職を維持・継承させるために学習途上の者に対して学習意欲を喚起することを意図した。

③唐人屋敷を通しての異文化理解。

鎖国政策・唐人屋敷造営以降、限定的となった中国文化との接点である唐人屋敷を教材本文の場面として設定し、中国文化（異文化）についての理解と知識を増やすことを意図した。

以上から考察すると「初進館」は、唐通事の業務に関する高度で専門的な学習をする前の学習者を対象にした中国語会話の熟達と中国文化の理解を意図して作成された教材であると推測できる。

「初進館」は、『譯家必備』の他の項目と異なり、業務に直接関連しない稽古通事の唐人屋敷内での異文化接触を内容とし、唐通事編輯の教本に見られる多数の日常用語の列挙という方法を用いている点などから、『小孩兒』・『養兒子』・『官話纂』・『唐通事心得』や『長短拾話唐話』と同様に独立した教本として編んだものを後に他の項目と合わせて『譯家必備』として1冊にした可能性は否めない。

注

1) 「唐」という呼称について、林陸朗『長崎唐通事』p.1に次のように説明されている。

江戸時代、長崎を対外関係の重要な地と認識した江戸幕府は、早くこの地を直轄地として長崎奉行を置き、直参の上級旗本を任じて統治させるとともに、対外関係の業務を担当させた。対外関係といっても主としてオランダと中国である。この当時、中国は王朝として明、ついで

で清であるが、ともに唐と通称し、中国人を唐人、中国船唐船、中国との貿易を唐船貿易または唐人貿易といった。

「唐通事」は、1603（慶長8）年初代の長崎奉行小笠原一庵によって長崎在住の唐人の馮六が登用されたのに始まり、幕末の唐通事解散まで述べ1644（実数は826）名が務めた。職掌は、中国語の通訳・翻訳、貿易業務、在留唐人の管理、長崎奉行の外交・通商上の諮問を受けることなどであった。江戸時代、中国語の通訳を「唐通事」、オランダ語の通訳を「(和)蘭通詞」と書き分けた。

- 2) 唐通事が編輯した教本は、長崎県だけでも県立図書館等を中心に『唐通事心得』・『長短話唐話』など20種類以上が確認されている。小論で取り上げた『譯家必備』は、長崎歴史文化博物館、静嘉堂文庫、関西大学図書館、天理図書館で所蔵されている。
- 3) 代表的な教本として『小孩兒』・『官話纂』・『唐通事心得』などがある。
- 4) 長澤規矩也「解題」『唐話辞書類集第20集』p.1
- 5) 『譯家必備』は、中国語の単語・短文を列挙し、その下に日本語で意味を示すという形式の「唐話辞書」の形式ではないということを述べている。唐通事が編輯した辞書の中には岡嶋冠山の『唐話纂用』や『唐話使用』に代表される辞書形式が多かったことを意識しての記述と考えられる。
- 6) 武藤長平『西南文運史論』p.51
- 7) 奥村（2019）は、『譯家必備』の「初進館」の本文にある「乾隆帝の南巡」・「酉年二十二番船主沈綸溪長崎来航時期」・「唐人屋敷内の建造物の建築年代及び「護送日本難人」の内容から同書の成立は、1754（宝暦4）年頃であると推定している。
- 8) 中嶋幹起「唐通事が学んだ言語とその教科書」『中国語教育第13号』p.6
- 9) 1ページが27文字×8行、合計17ページあり、文字数で約4000字となる。但し、第1頁のみ項目名「初進館」を挙げるため27文字×6行となっている。
- 10) 「(唐)館」の呼称について、山本紀綱『長崎唐人屋敷』p.207に次のような記述がある。

唐人屋敷は…一般的には「唐人屋敷」または「唐館」、ある場合は「華人華館」・「土庫」などと呼ばれた。

唐人屋敷設置の目的と規模について、『長崎県史対外交渉編』p.511、p.515に次のような説明がある。

江戸幕府が長崎に来航する唐人を一定の場所に囲い込んで、オランダ人と同様に一般日本人との接触を断ち切るために、1689（元禄2）年に長崎十善寺に設けられた施設である。その目的は唐人によるキリスト教の伝播を防ぐこと、唐人貿易の密貿易を防止することであったと言われている。その規模は、総坪数9373坪余で、唐人住宅・風呂屋・閔帝堂・観音堂・土神祠・天后堂（媽祖堂）が設けられていた。（p.511）唐人の住宅すなわち唐館は十九棟、二階造りになっていて、階上階下あわせて50の部屋に割ってある。階上は20部屋で船頭・客商が住む。（p.515）
- 11) 「學通事」という通事の階級は存在しない。「學通事」は、「學」の「習う、学ぶ」という意味から「稽古通事」を指すと考え、小論では「學通事」を「稽古通事」と訳す。「稽古通事」は、1653（承応3）に子弟の通訳実務の教育や後継者育成の目的で増設された職階で、大通事や小通事の子弟だけが就くことができた。
- 12) 「公堂」という語について、汪鵬「袖海編」『小方壺齋輿地叢鈔』p.4に次のような記述がある。

通事官與客會話之所曰公堂
- 13) ページ数は、『唐話辞書類集第20集』のページを指す。
- 14) 通事に対する敬称。李猷璋『長崎唐人の研究』p.317に次のような説明がある。

通事は、中国商人が用事万端を接衝する窓口であり、彼らの利権を左右する直接的な役なので、…中略…寛文初年、長崎預ヶ銀を争う鄭氏両家の書簡に「老爹」という官人に対する尊称を用いられたのもそれを示すものである。

15) 場面3の接待が始まる前、林稽古通事が船主に対して屋敷内の案内のお礼を述べる部分で、案内役の唐人は「陳三官」という名であることが分かる。

今天小弟頭一擔進來，不曉得館裡的道理。虧得勞動他陳三官一周遭帶小弟轉一轉，領教過許多事情，樣樣都明白了。

16) ページ数の表示は、『養兒子』を収めた『中国語教本類集成』第一集第一冊のページ数を指す。

17) 唐通事は、1678(延宝8)年に帯刀が許された。また、『唐通事心得』の本文の語句から唐通事が帯刀していたことが分かる。

連唐話竟不會講，穿領長衣，插把好刀，只說自己上等的人，……

18) ページ数の表示は、『小孩兒』を収めた『中国語教本類集成』第一集第一冊のページ数を指す。

19) ページ数等の表示は、『官話纂』を収めた『中国語教本類集成』第一集第一冊のページ数を指す。

参考文献

- 武藤長平 『西南文運史論』 岡書院 1962.
- 古典研究会編輯 『譯家必備』 唐話辞書類集第20巻所収 汲古書院 1976.
- 山本紀綱 『長崎唐人屋敷』 兼光社 1983.
- 長崎県史編輯委員会 『長崎県史 対外交渉編』 吉川弘文堂 1986.
- 六角恒廣 『中国語教育史の研究』 東方書店 1988.
- 六角恒廣編 『中国語教本類集成』 第一集第一冊 不二出版 1991.
- 李獻璋 『長崎唐人の研究』 長崎親和銀行 佐世保 1991.
- 若木太一 「唐話辞書・東京語辞書・朝鮮語辞書」 『辞書遊歩』 九州大学出版会 福岡 2004.
- 林陸朗 『長崎唐通事』 増訂版 長崎文献社 長崎 2010.
- 中嶋幹起 「唐通事が学んだ言語とその教科書」 『中国語教育』 第13号 中国語教育学会 2015.
- 奥村佳代子 『近世東アジアにおける口語中国語文の研究』 関西大学出版部 大阪 2019. (関西大学東西学術研究所研究叢書58)
- 汪鵬 「袖海編」 『小方壺齋輿地叢鈔』 第十帙 著易堂 上海 1891.
- 『小孩兒』 成立年不詳 (六角恒廣編『中国語教本類集成』 第一集第一冊 不二出版 1991)
- 『養兒子』 成立年不詳 (六角恒廣編『中国語教本類集成』 第一集第一冊 不二出版 1991)
- 『官話纂』 成立年不詳 (六角恒廣編『中国語教本類集成』 第一集第一冊 不二出版 1991)
- 『唐通事心得』 長崎県立図書館所蔵 成立年不詳
- 『長短話唐話』 長崎県立図書館所蔵 成立年不詳
- 喜多田久仁彦 「長崎唐通事とその教科書《小孩兒》」 『京都外国語大学中国語学科創設20周年記念論集』 1995.
- 喜多田久仁彦 「唐通事の教本《養兒子》(一)」 (『京都外国語大学研究論叢』 第47 1996)
- 喜多田久仁彦 「唐通事の教本《養兒子》(二)」 (『京都外国語大学研究論叢』 第49 1997)
- 喜多田久仁彦 「唐通事の教本《養兒子》(三)」 (『京都外国語大学研究論叢』 第51 1998)
- 喜多田久仁彦 「唐通事の職掌について」 (『京都外国語大学研究論叢』 第76 2011)
- 喜多田久仁彦 「唐通事の中国語について」 (『京都外国語大学研究論叢』 第87 2016)

